

化学教育 徒然草



— ウィズコロナの実験教育 —

ISHII Youichi

石井 洋一

中央大学理工学部応用化学科 教授
関東支部 副支部長 / 化学教育協議会 議長



巻頭言

新型コロナウイルスの流行が始まってから2年になろうとしているが、この夏の感染急拡大やその後の収束など、めまぐるしい状況変化になかなかついていけない感がある。言うまでもなく、実験教育は生徒たちが物質の変化に直に触れて化学に興味を持つようになるための「心の種蒔き」として重要なものであるが、実地対面が基本なだけにウィズコロナの対応は難しい。昨年来の「徒然草」のご寄稿にもあるとおり、感染対策を施しながら手探りで実験教育に当たってこられた先生方のご苦労は大変なものであっただろう。

実は、最初の1年は実験教育が途切れてしまうのではないかと少々心配していた。しかし、2021年の春に関東支部の第38回化学クラブ研究発表会に参加する機会があり、オンラインではあったが中学・高校の皆さんの発表を伺うことができ、だいぶ見方が変わった。コロナ禍の不自由な環境であるにもかかわらず、どのグループも驚くほど充実した研究成果を発表していて、先生方のご指導に頭が下がる思いであった。同時に、多くの生徒たちが化学に深い興味を持ち続け、熱心に実験を続けていることがよくわかり、大いに心強く感じたものである。

一方、自分自身は大学で実験教育に携わっている。今でこそ、コロナ禍にあっても何とか対面の実験教育を行うノウハウが少しずつ蓄積されてきてはいるが、昨年の流行初期にはオンラインで視聴させる実験のビデオ作製などに忙殺されたものである。なんとか学期のオンライン実験（実験と言ってよければ）が終盤にかかるところ、学生から「実際に実験をしたかった」という声が次々に寄せられるようになった。大学の方針で学生をキャンパスに呼ぶことはできないのであるが、同僚と語らって「実験講座」をボランティアで企画することになった。秋口になって感染者が減ったころ、ようやく学部の許可が取れた。学生に伝えたところ、夏休み中にもかかわらず、単位もつかない講座に半数以上の学生が参加を希望してきた。大学の学生もやはり実験に飢えていたのだ。しみじみそう感じると同時に、化学教育のあり方を改めて考えさせられた。実は、そのような機会をコロナで与えられたというべきなのかもしれない。

今後のコロナの状況はなかなか見通せないが、化学の根幹でもある実験教育では学生・生徒たちの期待にしっかり応えてやりたいと思う。この2年ほどの経験を踏まえて、ウィズコロナの実験教育が充実することを願ってやまない。

[連絡先]

112-8551 東京都文京区春日 1-13-27 (勤務先)